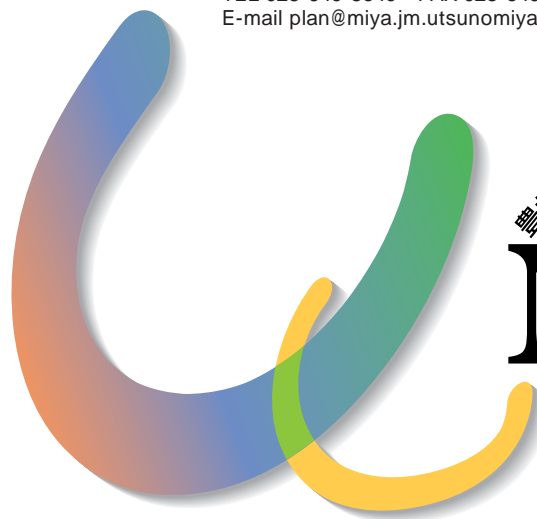




〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026 URL http://www.utsunomiya-u.ac.jp
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp



豊かな発想を地域に、新たな知を世界へ

NOW

● vol.14

発行：宇都宮大学
編集：広報室

CONTENTS

- 1 チャレンジャー
- 2 特集・変わる峰キャンパス
- 4 地域貢献REPORT
- 5 SLOW FOOD
- 6 学生アンケート「宇大生は今!」
- 7 INFORMATION
- 8 研究 Keyword



INTERVIEW

チャレンジャー

人生に役に立ち学び

中国製冷凍餃子問題や食品偽装問題など、いま、食品の安全に対し厳しい目が向けられている。「分析試験を通じて『健康と安全』をサポートする」ことを使命とする食品分析センターの理事長として、こうした問題に最前線で向き合っている齋藤文一さん。宇都宮大学時代、先生と学生が「丸」となつて実験研究に取り組んだ濃密な時間が、いまの仕事に就くきっかけとなった。仕事のこと、「酔っ払ってフランス式庭園の池で泳いだこともある」という学生時代の思い出、私たちが若者への想いを語っていただいた。

(取材／農学部4年 吉岡俊知 同・杉本和子)



財団法人 日本食品分析センター 理事長

齋藤 文一

Saito Bunichi

[さいとう・ぶんいち]1946年大分県大分市に生まれる。69年宇都宮大学農学部農芸化学科卒業。同年、財団法人日本食品油糧検査協会(同年7月財団法人日本食品分析センターと改称)入所。89年大阪支所長、96年多摩研究所長、03年理事長に就任。05年～08年日本食品微生物学会理事長就任。専門は食品微生物学。

「おまじこと」が原点

「私たちは依頼のあったサンプルを検査するだけではなく、検査結果を現場にフィードバックする努力をしている。結果が悪かったら何が原因かを依頼者と一緒に究明し、異常のあった部分を改善しなければならぬ。検査結果が活用されなくては意味がないのです。」

データの信頼性の確保が生命線である。分析機器の温度設定一つにしても細心の注意を払う。自動モニターだけに頼らず、人間の目で一日に何度も確認し設定に間違いがないことを証拠に残していく。停電などのトラブルで分析結果に異常をきたしても記録を残しておけば原因の確認作業ができる。

「正しい結果でなければ現場に

フィードバックしたときに不具合が出てしまふ。正確性を確保するために、そこまでするのか」と皆さんがびっくりするほどの対応をしています。学生のみならずも天秤やPHメーターなどの計量器をきちんと管理しないと正しいデータは得られない。私たちに言わせれば、学生の分析は正確、信頼性という点では「おまじこと」と手厳しい。

だが、その「おまじこと」がシビアな現場と向き合う齋藤さんの原点でもある。

先生・先輩との濃密な時間

乳酸菌を使って酵母エキスに含まれる糖の発酵をインデューズ(誘導)する物質は何か、先

生、学生が丸となつて追いか

けた。当時は、いまのように設備が整いオートメーション化された時代ではない。微生物の培養に使う培地など実験資材も手作り。何から何まで自分たちでやらなければならぬ。先生も大学院の先輩たちも、その大変さを知っているから、みんなが協力し合い一緒に作業をする。気分転換の酒飲みもキノコ採りも一緒だった。ともに学び遊んだ先輩たちとの付き合いは、いまも続く。

「いまの学生はどうなのかな。共同作業のようなものも少なくなつて、先生と学生、学生同士の間が薄くなつてきているんじゃないかという心配がある。」

コミュニケーションが薄れて

いる時代だからこそ、「人と人との関係を大切に」との想いが強い。「政治のこと、社会のこと、世界のことも、喧々諤々大いに語り合つてほしい。こじんまりした学生はいい。個性を磨くことです。いまの学生はみんな金太郎飴。能力も、思考方法もほとんど同じ、それではおもしろくない。そうならないために、学業だけではなく人生に役に立つようなことを学んでほしい。勉強以外に強みを持った人間は、社会に出たとき、いつか必ず光ります。」

タバコのように食らいつく

宇大の先輩に「研究ができるから」との誘いを受け嬉々として入社した職場は、「地下の一室を改装した実験室で、設備も充分ではない。仕事も少ない。これでよく給料がもらえる」と心配になった」という。

半年後、環境は激変する。人

工甘味料「チクロ」に発がん性があることが分かり、日本中が大騒ぎとなった。「チクロが含まれていない」という証明を得るため分析依頼が殺到した。その後PCR、農薬、水銀などの公害問題が次々と明るみになった。分析センターはそういう問題に積極的に取り組んだ。齋藤さん自身は大学時代の研究テーマだった微生物の分析を担う。「タバコのように何にでも食らいついて一生懸命勉強し

た」という。時代の要請だったのだらう。入社当時40人だった職員が、現在1300人までに成長。そのトップに立つ齋藤さん。「私は職員とその家族の生活を守る責任がある。だから必死です。」

「確かに若い人は、大きな会社に憧れるところがあるかもしれない。でも小さな会社には成長していく様子を体感できる充実感がある。取ってチャレンジャーになつて、小さくても成長が期待できる会社に進むことも一つの選択だと思う。ただ言えることは、会社の大小にかかわらず、何事にも自分から飛び込んでいく気持ちがあれば、自らの成長はない。」

(文・ヒオス編集部/撮影・木原悠策)